

変性疾患における終夜睡眠のポリグラフィ的研究:
パーキンソニズム、ハンチントン舞踏病、オリーブ
・橋・小脳萎縮症について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード: 作成者: 炭谷, 信行 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/15206

学位授与番号	医博乙第1277号		
学位授与年月日	平成6年2月16日		
氏名	炭谷 信行		
学位論文題目	変性疾患における終夜睡眠のポリグラフィ的研究 －パーキンソニズム、ハンチントン舞蹈病、オリブ・橋・小脳萎縮症について－		
論文審査委員	主査	教授	山口 成良
	副査	教授	高守 正治
		教授	山本 長三郎

内容の要旨および審査の結果の要旨

脳器質疾患患者がさまざまな睡眠障害を呈することは、臨床上しばしば経験される。変性疾患の病巣部位は疾患特異性があり、その睡眠障害を検討することは、睡眠に関する神経機構を追求する上で、重要な意義を持つものと考えられる。本研究では変性疾患であるパーキンソニズム、ハンチントン舞蹈病、オリブ・橋・小脳萎縮症をとりあげ、その睡眠状態を終夜睡眠ポリグラフィによって研究し、比較検討した。

対象は、パーキンソニズム10例（51～71歳、平均62.8歳）、ハンチントン舞蹈病6例（27～63歳、平均43.5歳）、オリブ・橋・小脳萎縮症 (olivo-ponto-cerebellar atrophy, OPCA) 4例（42～47歳、平均44.3歳）と対照としての正常成人12例（48～77歳、平均63歳）である。全例について2～3夜連続の終夜睡眠ポリグラフィを記録し、Rechtschaffenらの標準分類に準じて睡眠段階を分類した。得られた結果は以下のごとくである。

睡眠変数についてみると、対照と比較して、パーキンソニズムでは入眠潜時が有意に延長し（29分、平均値、以下同様）、全睡眠時間が短く（397.4分）、REM段階数が少なく（3.9回）、REM段階が短かった（64.7分）。ハンチントン舞蹈病では入眠潜時が有意に延長し（20分）、REM潜時が延長し（145分）、REM段階が短かった（62.2分）。OPCAでは入眠潜時が延長し（18分）、全睡眠時間が短く（342.5分）、第2段階が短かった（125.5分）が、REM段階の睡眠変数は対照とほとんど差がなかった。3疾患に共通の所見として、入眠潜時の延長があった。ポリグラフ所見として、パーキンソニズムでは睡眠紡錘波が不明瞭で乏しい例を認める（5例）のに対し、ハンチントン舞蹈病では睡眠紡錘波は一般に比較的不明瞭で高頻度であった。また、非定型的なREM段階を各疾患に見いだした。すなわち、パーキンソニズムでは筋電図の抑制を欠くREM段階（3例）と睡眠紡錘波を伴うREM段階（1例）を認め、ハンチントン舞蹈病では睡眠紡錘波を伴うREM段階（1例）を認めた。OPCAでは筋電図の抑制を欠くREM段階（3例）、睡眠紡錘波を伴うREM段階（3例）、および睡眠紡錘波を伴い筋電図の抑制を欠くREM段階（3例）を認めた。OPCAではREM睡眠の量的指標である睡眠変数の変化は少ないが、REM睡眠の質的な変容が最も著明であると考えられた。

以上の変性疾患における量的および質的变化は、パーキンソニズムでの中脳黒質および青斑核、ハンチントン舞蹈病での尾状核、OPCAでの小脳、橋、下オリブ核のそれぞれの病変部位の睡眠調節機構に影響する差異に起因するものと考えられた。本研究は睡眠に関する神経機構を研究する上で変性疾患の睡眠ポリグラフィは重要な情報を提供し得ることを示唆したものであり、睡眠学ならびに神経精神医学に寄与する有用な労作と評価された。